

1 漢方の考え方：陰陽，虚実

はじめに

漢方治療を選択するに際し，現代医学的常識にもとづく適切な診断および治療方針の決定を行う必要がある。そのうえで，漢方治療が選択されるのが望ましい。患者の愁訴や症候の背後にある病態を十分に検索し，たとえば悪性腫瘍など重篤な疾患を見逃さないようにすべきである。原疾患に対する治療を行っても十分な効果の得られない例や愁訴の残る例，原疾患の明確でない例などには漢方治療を試みる価値がある。

1 臨床的に漢方薬を使うために

漢方薬を用いるには実地臨床にもとづき，次のような考え方からとらえる
とよい。

表1 臨床的に漢方薬を使うために

- ・漢方薬の使用条件を症候群としてとらえる
- ・漢方薬の効きやすい疾患や症候を知る
- ・虚実と陰陽は全身状態の漢方的評価であり，実際の治療に役立つ
- ・伝統的な漢方の考え方は臨床的に具体的に大雑把にとらえる
- ・ネガティブな使用条件として，副作用について知る
- ・頻用漢方薬の有用な使い方を知る
- ・効果の実感できる使いやすい漢方薬から用いる

a 漢方薬の使用条件を症候群としてとらえる

漢方薬を用いる際に重要な点は，一つ一つの漢方薬には，その適応となるべき特有の病態があるということである。それを症候群として具体的にとらえると理解しやすい。漢方薬の使い方でも，東洋医学独特の難解な用語や概念にとらわれる必要はない。

b 漢方薬の効きやすい疾患や症候を知る

漢方薬の効きやすい病名や症状を知っていれば、そのような患者に遭遇したときに漢方治療を試みやすい。反対に、漢方薬の効きにくい病気にくら漢方薬を使っても「効く」という実感は得にくい。はじめは使ってみて効くという実感の得られる「病名・症状—漢方薬」の組み合わせから使うことを勧めたい。

c 虚実と陰陽は全身状態の漢方的評価であり、実際の治療に役立つ

大雑把に言えば、虚実とは、俗にいう体力の強弱であり、栄養状態、消化吸收機能の良否などを含めた概念である。陰陽とは、基礎代謝の高低とほぼ同じで、若年者、代謝の盛んな元気な者、基礎体温の高い者は陽とされ、高齢者、代謝の低下した者、基礎体温の低い者は陰とされる。これらの虚実や陰陽の考え方は、漢方薬を選択するときの尺度として参照される。

d 伝統的な漢方の考え方は臨的に具体的に大雑把にとらえる

虚実陰陽以外の漢方的考え方にも有用な概念は少なくない。気うつ、瘀血、水毒などの用語がそれである。しかし、理解しがたい部分も少なくないので、あまりにこだわる必要はない。一つ一つの漢方薬の使い方を症候論的に理解してゆく過程で、臨的に参照してゆけばよい。

e ネガティブな使用条件として、副作用について知る

漢方薬といえども副作用はある。多くは胃腸障害程度の軽微なものであるが、なかには稀であっても重要な副作用もある。自分の用いる漢方薬の副作用については十分に知ったうえで使用することが望まれる。一般に、麻黄（マオウ）を含む漢方薬は胃腸虚弱者・高齢者・腎障害や心疾患のある人などで要注意である。稀な副作用としては、小柴胡湯とその類縁漢方薬などによる間質性肺炎、甘草含有製剤による偽アルドステロン症（低カリウム血症、血圧上昇など）などに注意する必要がある。

f 頻用漢方薬の有用な使い方を知る

漢方薬の中でも、対象疾患・症状の患者数が多く、かつ効果の得られる可能性の高い漢方薬は、頻用漢方薬として、まず第一に理解することが望まれる。専門領域によって違いはあるが、一般的には補中益気湯・六君子湯・大建中湯などであり、女性疾患では当帰芍薬散・桂枝茯苓丸・加味逍遙散など

である。

8 効果の実感できる使いやすい漢方薬から用いる

頻用漢方薬でなくても、特定の疾患や症状に有用な漢方薬もある。即効性という点では、アレルギー性鼻炎—小青竜湯、こむらがえり—芍薬甘草湯、片頭痛—呉茱萸湯などである。また、漢方で補剤（体力を補い気力を益す薬の意）とよぶ漢方薬群の中にも、比較的効果が実感できて使いやすいものがある。補中益気湯はその代表である。このほかにも使ってみると効果の実感できる使いやすい漢方薬がいくつかある。変形性膝関節症による関節水腫に防已黄耆湯、月経前症候群に抑肝散などである。こうした漢方薬をまず用いてみることをお勧めする。

2 病名で選んでも効きやすい漢方薬

表2のような疾患には、それぞれ頻用漢方薬があり、病名で選んでも効く可能性が比較的高いと思われる。

3 漢方医学の古典的考え方を臨床的に理解する

病名や症候で漢方薬を選ぶ際にも、漢方医学の古典的考え方がある程度は尊重すると有効性が高まる。とくに虚実と陰陽の考え方は重要である。陰陽の違い、あるいは虚実の違いで、同じ病気でも異なった漢方薬を用いるからである。

a 陰陽（いんよう）という考え方（表3）

陰陽の評価により、“陰の病態”（陰証と表現）にあると考えられる場合には、体を“温める”漢方薬を用いると有効な場合が多い。たとえば女性の頻用処方のひとつである当帰芍薬散は、陰証（冷え症で体温も低い者）に用いるが、服用後に手足が温まり冷えが改善することが多い。感冒などの急性症では、陰陽の評価により、陰証にあると考えられれば、やはり“温める”漢方薬を用いる。たとえば感冒初期に寒けが強くて顔色が青白く体温も低いという者に用いる漢方薬に麻黄附子細辛湯がある。この薬を適切に用いると速やかに寒けがとれて感冒の治癒することが期待できる。

表2 病名で選んでも効きやすい漢方薬の例（とくに女性のために）

病名	頻用漢方薬
月経の障害	当帰芍薬散（虚証），桂枝茯苓丸（実証）
不妊症・排卵障害	当帰芍薬散，温経湯
更年期症候群	加味逍遙散
月経前症候群で易怒性	抑肝散
いわゆる冷え症	当帰芍薬散，当帰四逆加呉茱萸生姜湯
咽喉頭異常感症・軽症不安障害	半夏厚朴湯（初期）・柴朴湯（慢性）
ニキビ	清上防風湯・桂枝茯苓丸加薏苡仁
習慣性便秘	大黄甘草湯・麻子仁丸
片頭痛・閃輝暗点	呉茱萸湯（トリプタン製剤と併用可）
変形性膝関節症	防己黄耆湯
感冒・急性上気道炎	葛根湯（陽証）・麻黄附子細辛湯（陰証）
アレルギー性鼻炎	小青竜湯
慢性胃炎・FD・胃もたれ	六君子湯
過敏性腸症候群	桂枝加芍薬湯
術後腸管癒着	大建中湯
メマイ	苓桂朮甘湯，当帰芍薬散，半夏白朮天麻湯
有痛性筋けいれん（こむらがえり）	芍薬甘草湯
慢性疲労状態・消耗状態	補中益気湯・十全大補湯（貧血あり）

FD=functional dyspepsia

表3 陰陽の臨床的意味

○陰陽は病態と体質を表現する尺度である

慢性期では：

全身的代謝の盛んなもの・基礎体温の高いもの ⇒ “陽”

全身的代謝の衰えたもの・基礎体温の低いもの ⇒ “陰”

急性期では：

炎症反応（発熱など）が顕著なもの ⇒ “陽”

炎症反応（発熱など）が微弱なもの ⇒ “陰”

b 虚実（きょじつ）という考え方（表4）

表4 虚実の臨床的意味

- 臨床的な“実”
 - 消化機能の良好なもの
 - 筋肉が多く活動的なもの
- 臨床的な“虚”
 - 消化機能の不良なもの
 - 筋肉が少なく疲労しやすいもの
 - 内臓下垂が強いほど“虚”の程度が強い
 - 胃下垂・心下振水音は虚証とみなせる

実の病態にある者を実証と呼び、虚の病態にある者を虚証と呼ぶ。実証は栄養状態もよく胃腸も丈夫で、感冒時の発熱など、生理的反応も正常なので、鎮痛抗炎症剤などを用いたときにも胃腸障害を起こすことなく予期した効果を得られやすい。一方、虚証は栄養状態も悪く痩せて胃腸虚弱で、消化吸収機能も不十分なので、鎮痛抗炎症剤などで胃腸障害などの副作用を来しやすく、また予期した効果を得にくい。虚証では、適切な漢方薬を用いれば他の薬にない効果を期待しうる。慢性胃炎（functional dyspepsia）に六君子湯、慢性疲労状態に補中益気湯などを用いた場合の効果がその例である。

C 虚弱者（虚証）では腹部所見が重要（図1～3）

虚弱者（虚証）であるか否かは漢方治療のうえでは大変に重要である。その判別には振水音の有無が大いに参考になる。



図1 振水音（しんすいおん）

心下振水音・心窩部拍水音に同じで、上腹部腹壁を叩打すると水音がするものをいう。腹筋が軟弱なものが多い（腹力弱）、胃下垂、胃アトニーの徴候である。これを認めれば虚証として治療する。症候や疾患にもよるが、六君子湯、人參湯、四君子湯、茯苓飲、真武湯、半夏白朮天麻湯などを用いる場合に認めることが多い。また、この所見があるときには麻黄剤などは要注意で、服用後に胃腸障害などを呈しやすい。